



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第1号

徳島 1915年9月26日

1915/1812

「ロシア軍の国内へのたえまない退却は、戦略的措置にすぎない。」このような主張によって、ロシアでもその同盟諸国でも世論を沈静しようとする試みがなされている。すべては次のように信じ込ませるためのものだ。すなわち、ドイツ軍をできるかぎりその本拠地からロシアに引き入れて、そこでわが軍に「1812年」¹をもたらそうというのが、ロシア軍の総司令官ニコライ・ニコライエヴィッチ大公（この間処罰を受けずに罷免された）の意図だ、というのである。この主張は、自軍の重大な敗北のごまかしにすぎないのであるが、それは、わが軍がロシア軍とのきわめて激しい諸々の戦いに勝ち抜き、輝かしい勝利を得たという祖国からの知らせを読めば、誰の目にも明らかである。

1 ナポレオンのロシア遠征の年

ただ単にロシアに引き入れられただけだったら、わが軍はもっとやすやすと事を進めていただろう。今でもデューナ川やセレクト川でおこなわれている困難な戦闘は、ロシアの主張が嘘であることを暴くものだ。われわれの敵が、その防衛の第二線ですら十分な休息をとれないとすれば、それはひとえにわが軍の容赦のない前進のおかげである。それによってロシア軍は、わが軍を振り切って再編成をおこなうことができないのだ。

というわけで、今退却が前々からの予定通りだと言おうとしても、それは下手な言い逃れなのである。二三週間前、ロシア軍がヴァイクセル〔ヴィスワ〕川の戦線を放棄せざるをえなかったときにも、非常に強力な第二戦線で決戦を引き受けるのだと世界中に吹聴された。

ここで 1812 年との比較について述べよう。ナポレオン一世の時代には、ロシアへの進軍は今日とは違ったものだったはずだ。当時、戦争を養っていたのは敵国だった。1870 年と 71 年の戦役のときでさえ、わが軍はまだ大部分、フランスで徴発された蓄えで養われていた。この点で、戦争のやり方は大きく変化した。数百万のわが軍は、祖国からすべての必要なものを与えられている。敵国での徴発物は、もはや二次的な役割しか果たしていないし、もちろん必要とあらばまったくなしで済ますこともできる。

もっとも、ロシア軍は戦争をまだ多くの点において 1812 年のやり方でおこなっている。あらゆる町や村、農場の家は、退却の途中で瓦礫の山にされてしまい、穀物倉庫などは破壊され、住民は無理やり前線から後方に連れて行かれる。これは、わが軍に宿泊所を与える可能性をなくし、必要な食料はできるだけ遠くから取り寄せざるをえないようにするためだ。住民の強制移送は、ロシアの粗暴さのなせるわざである。それは、ポーランドにおけるように、ロシア人に敵意を持つ住民が対象であるならば、軍事的に説明がつく。しかし、純粋なロシア人住民に彼らの土地から立ちのくよう強制するのは、訳がわからない。いずれにせよ、これがなされるのは、収穫を台無しにされた住民を欠乏から守るためではなさそうだ。というのも、聞くとおころによれば、哀れな難民たちはまったく寄る辺ない状態にな

り、生きるために必要なものをどこで得るべきかもわからないからである。

ところで、この処置によってロシア人たちも、わが軍ではなくまず自分たちに損害を与えるのであり、必要なものはすべて後方から輸送されているわが軍に「1812 年」をもたらすことはできない。そうとすれば、とりわけ鉄道網がまばらで街道もほとんどない国で、何よりも標榜しているような急速な前進とそれに結びついた軍の移動がなされるときに、あのような大軍に食糧を補給するとはどういうことなのか。このことについて、ちゃんとしたイメージを描くことができる人はほとんどいないだろう。われわれの輸送部隊は、この点において大がかりなことを成し遂げなければならなかった。まず、狭軌鉄道が通じているワルシャワより向こうの占領地にある広軌鉄道を、われわれの狭軌に換える必要があり、それから軍用鉄道を敷き、街道を作るなどした。輸送の大部分は、おそらく鉄道によって解決される。街道が自動車通行の可能な状態であるところでは、トラックが非常に役に立つ。最近のロシアからの情報によれば、ドイツ軍は、ブク川周辺だけで 2,000 台のトラックが使えたということだ。もちろん、多くの水路も、膨大な量の輸送物資を処理するために可能なかぎり利用されている。ロシア戦役全体の期間において、わが軍がどこかで食料や弾薬の不足に見舞われたということは一度も読んだことがない。われわれが所有し、または作り出した諸々の輸送手段と、この戦争中周知のものとなったわれわれの組織力のために、わが軍はこの点何の不自由もしないだろう。

ロシアの権威者たちにとって、「1812 年」が、目下の状況において具合のよい文句であるのみならず、彼らが本当に、われわれに「1812 年」をもたらすことができると信じているとしても、われわれは、自由に使えるさまざまな手段についてよくわかっているのです、この点で敵に誤算があったことは明らかなのである。

ヴィルナ

先週のあいだに、われわれはワルシャワ占領以来最も重要なニュースを受け取った。日本の新聞がごく短いイギリスからのニュースを伝えた。ヴィルナ陥落である。

またこのような凶報をもたらさねばならないことがイギリス人にとってどんなにつらいことか、あたかもこの電報から見てとれるようだ。他ならぬヴィルナの陥落が、四ヶ国同盟にとって特にきびしい打撃であるのはなぜなのか、地図を一瞥すれば明らかである。

たしかにヴィルナは、ワルシャワやコヴノのような要塞ではないが、その代わりに北西ロシアの最も重要な結節点である。とりわけ今の瞬間にはロシア軍にとって重要だ。彼らには、全力をふりしぼって、可能な限り多くの部隊を、ドイツ軍の国内への進撃から救うことが肝要だからだ。すでに諸々の報告によって示されているのは、ロシアの大軍が、鉄道連絡線の切断によって危険な状況になっているということだ。

疑いもなくこれまでに実証済みの彼らの巧妙さが、迫りくる包囲を今回もすり抜けることに成功する、ということのないようお願いしたいものだ。

しかし、今度の場合でさえ、ドイツ軍によるヴィルナの占領は、やはりロシアにとっては重大な喪失である。というのも、これによってただでさえロシア帝国には少ない大都市がまたひとつわれわれの手に入ったからである。

われわれがこれまでに攻略した敵の大都市のリストを次に掲げよう。その数は今や8か所になる。

都市の大きさの比較のために、いくつかのドイツの大都市をともに挙げておく。記された人口は1910年のものである。

ワルシャワ	760,000	(ハンブルク	800,000)
ブリュッセル	625,000	(ミュンヘン	540,000)

ロッツ [ウッジ]	350,000	(フランクフルト・アム・マイン 335,000)
アントワープ	300,000	(ニュルンベルク 300,000)
リール	210,000	(ブレーメン 215,000)
リュッティヒ	170,000	(シュトラースブルク 170,000)
[リエージュ]		[ストラスブール]
ゲント [ヘント]	160,000	(マンハイム 160,000)
ヴィルナ	160,000	(ダンツィヒ 160,000)

まもなくこのリストにリガも加えることができればよいのだが。そうすれば、280,000 の人口を持つこの町は、5 番目の位置を占めることになるう。

日本の陶磁器（1）

日本は、尊敬に値するその独自の文化を中国における端緒から発展させてきた。日本と中国のように、ひとつの国が他の国から後々まで残る影響を受けたことは、おそらくめったにあるまい。日本の陶磁器製造も、中国起源のものだ。……という名の日本人²が、中国で陶磁器の製造を学び、1513 年に帰国して肥前の国、九州西端の入り江の多い地方で窯を造った。彼は、次の三種類の陶磁器の製造に成功したが、それらは後世もこの地方の主要な産物となっている。

染付、上葉の下に青で描かれた陶磁器。

罅形、上葉に細かい不規則な割れ目のある陶磁器。

錦手あるいは五彩、多色の陶磁器。

2 【注：この人名の部分は原文では、あとで削除されたかのように他の部分に比べて判読しづらい。この人物が誰のことなのかはわからないが、13 世紀に道元とともに南宋に渡り、瀬戸焼の「陶祖」となるとされる加藤景正（四郎左衛門、略して藤四郎とも呼ばれる）のことが誤って伝えられたのかもしれない。】

17 世紀の終わりに、ある朝鮮の陶工が有田（長崎の北）に移り住んだ³。彼はその付近ですぐれた材料を発見し、そのことによって窯業を再び興隆させた。磁器の製造は、だいたいのところ中国やヨーロッパと同じ方法でなされる。材料は、泉山から固く大きな塊で取り出されてくる。人力と水力によって突き臼の中で潰されて、それから微細な粉になるまで細かくされる。さらに一定量のカオリンを加え、その塊に水を入れて入念に掻きまぜ、できるだけ均一な混合物ができるようにする。それを別の容器へイグサの網目で濾し出す。そこで、上澄み液ができるまで全体を沈殿させる。水を捨て、溜まったものの上の方（その微細で軽い部分は最後に沈殿したもの）を、最も上質の磁器を作るのに用いる。幾分粗い粒子を持つ中ほどの物質からは、第二級の磁器がつくられる。最も粗く重い塊からなる最下層には、何の価値もない。こうして得られた材料は、空気で乾燥させる。加工の前に、もう一度水で軟らかくして捏ね、適当な塊にする。皿や花瓶、瓶などの形にするのは、ごく最近まで非常に原始的なろくろでおこなわれてきた。ろくろは、二つの水平の円盤からなり、それらは筒の中で回転する垂直の心棒によってつながっている。下の円盤は直径が約 90 センチあり、地面の近くをまわる。二つ目の小さな円盤は、心棒の上端に乗っており、回転可能な机になっている。この机の上に、作り手は一かたまりの陶土を載せる。それから円盤を足で回し、この塊から見事な技で瓶や花瓶、皿の形にする。形のできたものは、空気中でゆっくりと乾燥させ、それからもう一度手を加える。そののちに、柄や取っ手など、出っ張った部分を取りつける。特別に製造されたものやここで形の完成したものは、再び空気で乾かす。窯は木を焚いて熱する。点火されるまでに、焼くべきものを入れておかなければならない。突然熱したり、過度の熱を与えたりすると、ひびが入るからである。同じように、焼いたものを取り出すことができるのは、窯全体をさましてからでなければならない。それらをきれいな水で洗

3 実際には 16 世紀終わりの秀吉による朝鮮出兵により、陶工たちが連れて来られた。

い、入念に汚れを落とす。それから上薬を塗り、下絵のある磁器は前もって絵付けをしておき、二回目の焼きは大きな窯でなされる。その後焼き物はまた洗われ、きれいにされる。このときようやく多色の絵は描かれる。これをする、比較的低い温度で三回目の焼きが必要になる。陶磁器の製造にさいしては、当然のことながら分業の原理が非常に広まっている。それどころか、陶磁器工場によってはすべての品物が最後の焼きまでに 72 人の手を経るところもあると言われている。

つづく

トランプ競技

競技者・観戦者ともに多くの参加があり、月曜日にはスカートの、木曜日にはブリッジの競技がおこなわれた。賞品付きスカートは非常に早く終わったが、ブリッジの方は丸一日を要した。二位と三位については、翌日にまだ決定戦がなされなければならなかったほどである。ブリッジのゲームと同時に、下士官の賞品付きスカートがおこなわれた。他の競技と同様、これに対してもちょっとした賞品が寄付されていた。

結果は次の通り。

I. 下士官のスカート

1 位	一等兵曹	レンケル	919 点
2 位	一等兵曹	プリンツ	905 点
3 位	一等兵曹	リュールス	674 点

II. スカート

1 位	二等砲兵	クルツケ	931 点
2 位	二等砲兵	カンプフ	789 点
3 位	一等砲兵	アウアー	680 点

III. ブリッジ

1 位	ドーベ・ビラス組	9 勝
2 位	ヴィーザー・トムセン組	7 勝
3 位	シンメル・ハウン組	7 勝

最後の二つのペアは、グロッセ・イーリッヒ組とのきびしい最終戦ののち
にようやく勝利した。グロッセ・イーリッヒ組も、競技に関連する 3 番勝
負 11 回のうち 7 回勝っていた。賞品授与式は木曜日におこなわれたが、
追加で寄贈された賞品を 3 組の勝者に手渡すことができた。幸運な勝者た
ちに特に喜ばれたのは、二等砲兵ビラスによって「芸術的に構成された」
豪華なケーキであった。

商業講習

ここ数週間のうちに、われわれの講習会が始まる見込みである。正確な
日時は、いずれ掲示によって通知される。われわれの手元にある講習プロ
グラムによれば、まず次のようなテーマが扱われるだろう。

商業の歴史、国民経済の本質、ドイツの経済学、世界経済と世界市場、
国民経済の有機的構造、商法典、為替法。一般的な経済立法、社会学、収
入とその管理、生産、信用貸しと保険制度、交通機関、商業に役立てられ
る特殊な公的施設、貨幣・尺度・重量に関する学、商業地理。

これらの講習に続いて、事務の実践に関する短期講習があるかもしれな
い。

リヒャルト・ワーグナー（１）

おそらくどの音楽家にもまして毀誉褒貶のはなはだしいのは、リヒャルト・ワーグナーであろう。彼が創作した作品に対するような感激を呼び起こすことができた者は誰もいないし、それらは彼の死後ずっと今まで無数の人々の心を繰り返し激しく燃え立たせている。しかしまた、反対者が、しかもまさに音楽の専門家たちの中から、彼に対してほど多く出てきた例もない。すでに彼の生前から、反対者の大群が結集していた。ワーグナーが、「真の芸術」を世界に与えるのだという生涯抱いていた思いでいっぱいになって、攻撃や弁明において激しくふるまうと、彼らはそれだけますます責めたてたのである。あまりにも熱心な彼の信奉者たちも、この大家を讃えるときの排他性のために、彼に対する反感に油を注いだのであり、彼らの誇張にいささか滑稽なところがあったために、嘲笑されるようになったのである。どちらの側にも行きすぎがあり、争いははてしなく続いた。

そもそも、賛意にせよ敵意にせよこうした大仰さは、すでに尋常でない才能と業績の存在を証し立てるものである。いずれにせよ、今の世代の人々は、一般に次のような判断を下している。すなわち、リヒャルト・ワーグナーは、音楽の領域において先駆的な仕事をし、大いに成功を収めたのであり、彼は音楽における天才的英雄、まぎれもない人気者となったのである。運命によってしばしばかなり厳しい試練を課せられたこの大家にも、すでに生前からそのような成功の兆しを感じるという恩恵が与えられていたことは、喜ばしいことである。

リヒャルト・ワーグナー（1813年5月12日生まれ）は、芸術的な素質をもつ家族の出であった。すでに11歳のとき、詩作したいという意欲を感じていた。文芸創作の最初の冒険の中には、二年かけて作った大がかりな悲劇もある。彼自身の言によると、この戯曲が進む中で42人の人物が死に、若き詩人は、悲劇的に命を奪われたこの人々の大半を幽霊として再登場させなければならなかった。そうしなければ、最後の幕で人物が足

りなくなるからだった。

ワーグナーは、全般的な教養ということについては非常に熱心に勉強した。若い頃は、ギリシアの詩人たちやシェイクスピアを特に愛読した。ライプツィヒの大学では哲学や美学の講演を聞いた。壮年になってからは、ヘーゲルやルートヴィヒ・フォイエルバッハ、アルトウール・ショーペンハウアーの著作を研究した。バイロイトにある彼の別荘「ヴァーンフリート」の大きな書庫には、ドイツの伝説や神話、古いインドの文学に関する非常に多くの原典資料もあった。

こうした包括的、全般的な教養によって、ワーグナーは自分のオペラのための戯曲作品をみずから書き、それらを統一的な全体として現出させることができた。また、ドイツの伝説やあらゆる神話的人物や英雄を用いることによって、彼の作品は、われわれドイツ人にとっていっそう好ましいものとなっている。

詩人作曲家としての特質において、ワーグナーは、彼につづくオペラ作者たちにとって先駆であり模範であった。けれども、おそらく今まで彼に匹敵する者はまだいない。

ワーグナーの音楽への愛は徐々に発展していった。彼に大きな印象を与えた最初の音楽作品は、彼が通っていた学校のあるドレースデンで聴いたウェーバーの『魔弾の射手』であった。彼は、ピアノを習い始めた生徒だったが、こっそりとその序曲を練習して覚え、それを知った彼の先生は非常に機嫌を損ねた。このオペラが彼の心をどれほどの力で魅了したかということを、彼みずから後年描写している。18歳のとき、彼はベートーヴェンの楽譜の研究に没頭し、何よりもすべてのドイツの作曲家の中でこの最も天才的な人を尊敬した。ワーグナーは、モーツァルトの作品も非常に愛した。

いくつかのソナタとポロネーズの習作の後、ワーグナーの処女作として、序曲と交響曲が出版された。この序曲では4小節ごとに太鼓の強打が繰り返されたが、ライプツィヒでの1829年の初演のさいには、笑いを誘うと

いう望ましくない結果を招いた。若き作曲家は十分な洞察力を持っていたので、聴衆といっしょになって笑い、音楽による自分の初演説に対する拒否をもっともなことと考えた。1833年にライブツィヒのゲヴァントハウスで上演された交響曲は、より大きな成功を収めた。

つづく

チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

第 45 問の解答

1. d3 - d4 任意の手
2. D か T か Bd4 で詰み

第 46 問の解答

1. Sc6 - d4 Kd5 x c4 (x e4)
 2. Dd1 x a4(x g4+) 任意の手
 3. D で詰み
 1. T か Sh8 を動かす
 2. Sd4 - b5 任意の手
 3. S で詰み
- 他の変化も簡単。

正解者はヨーゼフ・ヴェーバー

第 47 問 白：Ke2, Td1, Lf8, Se3, e7, Bc5, f3

黒：Ke5, Tg4, Lg3, Bc3, c7, e6, f6, g6

2 手詰め

第 48 問 白：Ke4, Dh2, Te3, Bh6

黒：Kd7, Ba5, b4, b5

3 手詰め

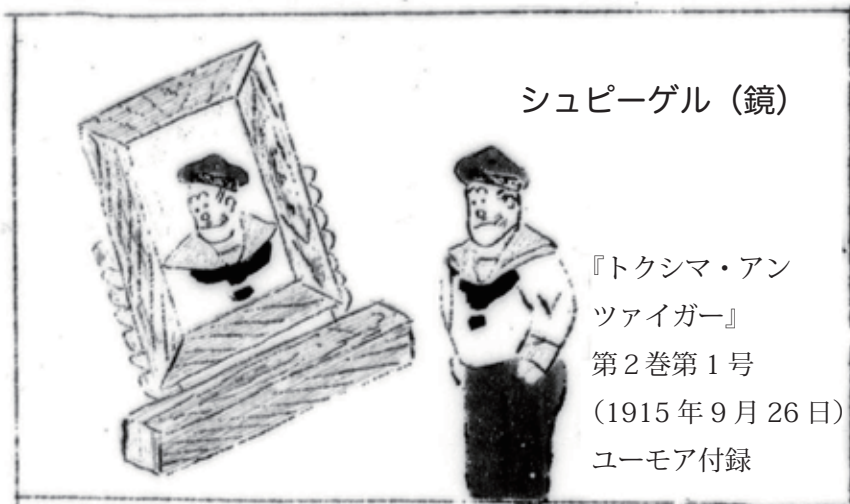
第 20 回コンサート

1915 年 9 月 26 日

- | | |
|--|----------|
| 1. 「剣闘士たちの入場」 凱旋行進曲 | I. フチーク |
| 2. オペラ『ローエングリン』より「花嫁の合唱」 | R. ワーグナー |
| 3. 「ヴェーザー川のほとりで」
トロンボーンとオーケストラのためのリート | プレッセル |
| 4. ヒットソングメドレー | P. リンケ |
| 5. 「アイシャ」 インディアン間奏曲 | I. リンゼイ |

講習会

近々簿記（まず単式、次に複式）の講習会が開かれることになっている。
参加申し込みの受け付けは、予備役火工副下士コッホ





ドイツの歌

ドイツの櫓のように
思いもよらぬ強さで
われらの合唱団は
芽吹き、高く育つ。
男たちの胸の中から
朗々と調べが響き
楽しげに仲間の内で
歌謡の喜びが音となる。

われらのため幾たびも
美しい古い歌がうたわれ
心のこもった民謡や聖歌が
故郷の響きを再び聴かせる。
崇高なくさの歌のとき
皆その時代に思いをはせる。
戦いや剣戟の響き、突撃や
疾駆する騎馬が聴こえないか。

歌の中に漂っているのは
昔のドイツの霊ではないか。
われらの職匠たちの歌が
記憶から呼び起こされないか。
この宇宙万有の中で二人の
ドイツ人が出会いさえすれば、
ほどなく盃を打ち合わす音と
楽しげな歌が聴こえたものだ。
古い黄金色のワインのように
男たちの喉から歌がこぼれる。
うれしいときも悲しいときも
歌はわれらを高めるだろう。
だから古いドイツの歌よ、
ここでも昔のように鳴り響け。
われらの同胞が戦っている
遠い祖国と同じように。



おい、とフリッツが言う。東屋で
この間座っていたら、そうやって
昼食の後、すっかり
勉強を忘れたみたいなんだ。
なぜならこれはお仕置きものだな、
ゆっくり眠りこんでしまったから。
ところでカール、眠ってる間、
おれが何を夢見たと思う？
スカートとブリッジをやって
おれが一番であがりになった。
その頑張りに対して賞品の鴨が
遠くから手招きしているんだ。
鴨のごちそうがだんだん近づく。
それに手を出そうとしたとき、
だしぬけに目が覚めたんだ。
おお、何てこと考えてたんだ。

おれの前にカラスがとまって
がつがつカエルを呑み込んでる。
これは悪いきざし

だろうか。

それなら

悪魔に

くれてやる。

それとも、よくはわからんが
三等賞をもらえるのかも。

